

## 1 特別支援教室の利用による指導の検討

在籍学級において、適切な支援を行っても、なお課題が継続する場合、巡回指導教員やスクールカウンセラー、巡回相談心理士に協力を要請し、再度複数の視点で実態把握を行い、支援方法について検討する必要があります。また、保護者と面談を行い、学習上・生活上の困難な状況の共有や、医療機関等との連携、発達検査の実施などについての合意形成を図ります。

支援レベル2から3の検討に当たっては、東京都教育委員会で作成した「読み書きチェックリスト」、「社会性・行動のチェックリスト」や「『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント」等を活用し、障害の特性を考慮しながら、重点的に指導すべき項目を明確にします。

## 2 「読み書きチェックリスト」、「社会性・行動のチェックリスト」の活用

P103～104 様式2

児童・生徒の障害の特性に応じて、「読み書きチェックリスト」や「社会性・行動のチェックリスト」を作成し、校内委員会の検討資料とし、支援レベル2（学習支援員の活用等）や支援レベル3（特別支援教室）の支援が必要かどうか検討します。

各種チェックリストは、児童・生徒一人一人の様子を観察して作成します。作成においては、当該児童・生徒に対して、在籍学級担任、教科担任、特別支援教育コーディネーターや巡回指導教員等、複数の視点で行い、関係する教員間で協議・調整の上、校内検討委員会の資料とします。チェックリストの作成・集計により、指導上の課題の傾向を把握することができます。（79、80ページでは、「社会性・行動のチェックリスト」を活用した指導目標設定の例を示しています。）

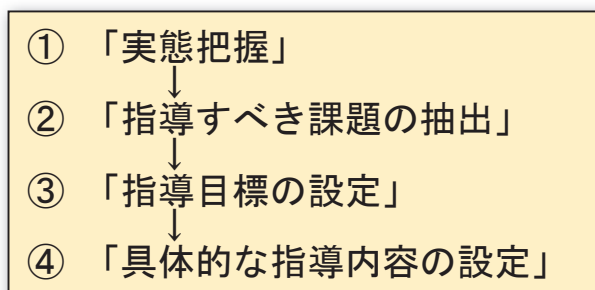
### 3 指導目標・内容の設定について

小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）では、特別な配慮を必要とする児童への指導として、次のように示しています（中学校学習指導要領においても同様）。

#### 小学校学習指導要領第 1 章第 4 の 2（1）

ウ 障害のある児童に対して、通級による指導を行い、特別の教育課程を編成する場合には、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領第 7 章に示す自立活動の内容を参考とし、具体的な目標や内容を定め、指導を行うものとする。その際、効果的な指導が行われるよう、各教科等と通級による指導との関連を図るなど、教師間の連携に努めるものとする。

特別支援教室において、上記の特別支援学校小学部・中学部学習指導要領に示された「自立活動」の内容を参考とした指導を行うに当たり、具体的な指導を計画する際は、次の手順で作成します。



#### 実態把握から具体的な指導目標の設定の例

- ① **実態**：漢字や図形の問題が苦手で、落ち着きがない。  
↓ ※自立活動の 6 区分 27 項目の内容を参考に、要因や背景となる課題を分析
- ② **指導すべき課題の抽出**：注意の集中・持続性、視覚による記憶など  
自立活動の区分「4 環境の把握」から  
（2）感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること  
↓
- ③ **指導目標**：視覚から入った情報を思考の中で立体に置き換えていく力を高める。  
↓
- ④ **具体的な指導内容**：  
例) ホワイトボードに示された立体図を見て、机上の立体ブロックを組み立てる。

特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（平成30年3月）では、児童・生徒の実態把握から、自立活動の具体的な指導内容を設定するまでの例として、13事例が示されています（P32～39、P128～P171）。

対象となる児童・生徒の学校生活における課題は様々ですが、上記の事例等も参考とし、認知面や行動面に留意しながら、重点的な課題や優先する指導内容を絞り込んでいくことが重要です。

その際、指導終了時点の児童・生徒が、在籍学級で学習する様子をイメージし、長期的な観点（概ね1年間程度）と短期的な観点（学期毎の指導期間を想定）で、「原則の指導期間」に児童・生徒がある程度、達成の可能性がある指導目標を設定します。

### ① 「実態把握」

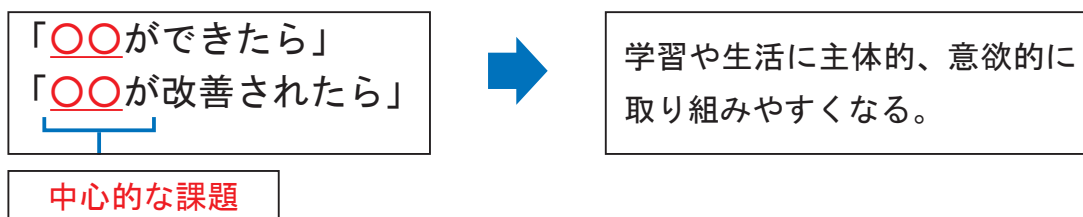
- ・日々の観察や記録とともに、「読み書きチェックリスト」や「社会性・行動のチェックリスト」等を活用する。

障害の状態は児童・生徒一人一人異なります。そのため、実態把握に基づいて設定する指導目標や具体的な指導内容、指導方法も、必然的に一人一人異なります。

### ② 「指導すべき課題の抽出」⇒中心的な課題

- ・優先順位を考えて課題をリストアップする。  
必要性・緊急性・達成の可能性・成果への期待 等
- ・つまずきに対する指導のみを考えるのではなく、つまずきの原因を分析する。

原則の指導期間に・・・



### ③-1 「指導目標の設定」（長期目標の設定）

- ・指導終了時点の「在籍学級における様子」をイメージする。
- ・学校生活支援シートに示された本人や保護者の思いを踏まえる。

中心的な課題に対して、児童・生徒がどのような姿になるのかを期待し、具体的なイメージをもって長期目標を設定します。在籍学級と、特別支援教室が共通理解を図りながら

指導するためにも、一年間で取り組む指導目標は、一つか二つに絞りましょう。ただし、実態把握から明らかになった複数の目標の中の一部であることも共有しておく必要があります。

### ③ー２ 「指導目標の設定」(短期目標の設定)

- ・ スモールステップを意識して、段階的に高めていく。
- ・ 評価が可能な記述をする。(条件や基準値等を設定する⇒具体的な評価)

長期目標を達成するためには、一人一人の児童・生徒の状況に応じて、必要な指導内容を段階的、系統的に取り扱います。また、段階的に短期の指導目標が達成され、それがやがて長期の指導目標の達成につながるという見通しをもって指導を計画することが重要です。

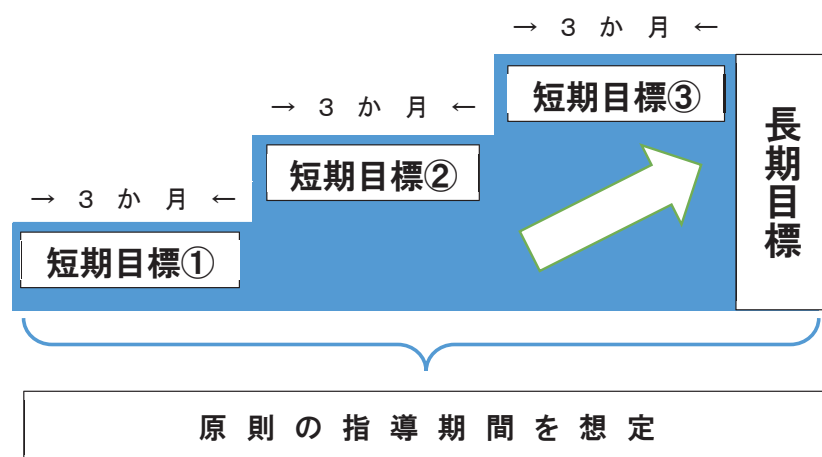
#### 指導目標設定のポイント

具体的な指導目標を設定するための3つの要素

- ① 指導場面を限定して記述する。【場面・対象】
- ② 数値や量などで表すか、具体的な内容を記述する。【量・手段】
- ③ 具体的に想定される動作や表出を記述する。【動作・表出】

#### <指導目標のスモールステップのイメージ>

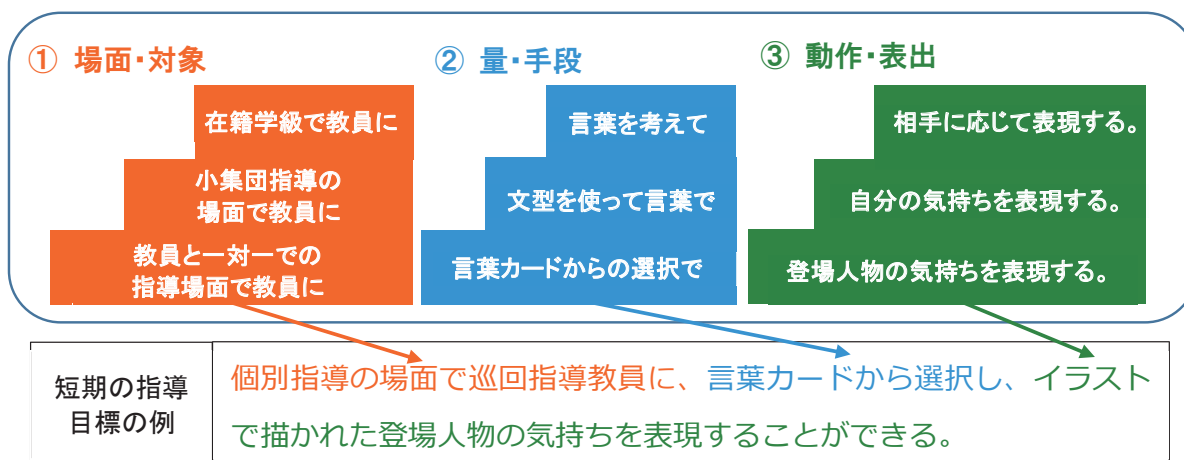
上記「指導目標設定のポイント」にある、指導場面や支援の手段、表出等について、段階的に設定した短期の指導目標を達成することによって、長期の指導目標が達成されていくイメージです。



※1学期間(3か月)を「1セッション」と考え、3か月×3セッションの指導目標

## スモールステップの例

長期の指導目標の例：教員に対して適切な言葉で意思を伝えることができる。



特別支援教室の指導目標の設定には、在籍学級担任の関与が不可欠です。「原則の指導期間」の期間内に達成が見込まれる目標であるかどうか検討する必要があります。

## ④ 「具体的な指導内容の設定」

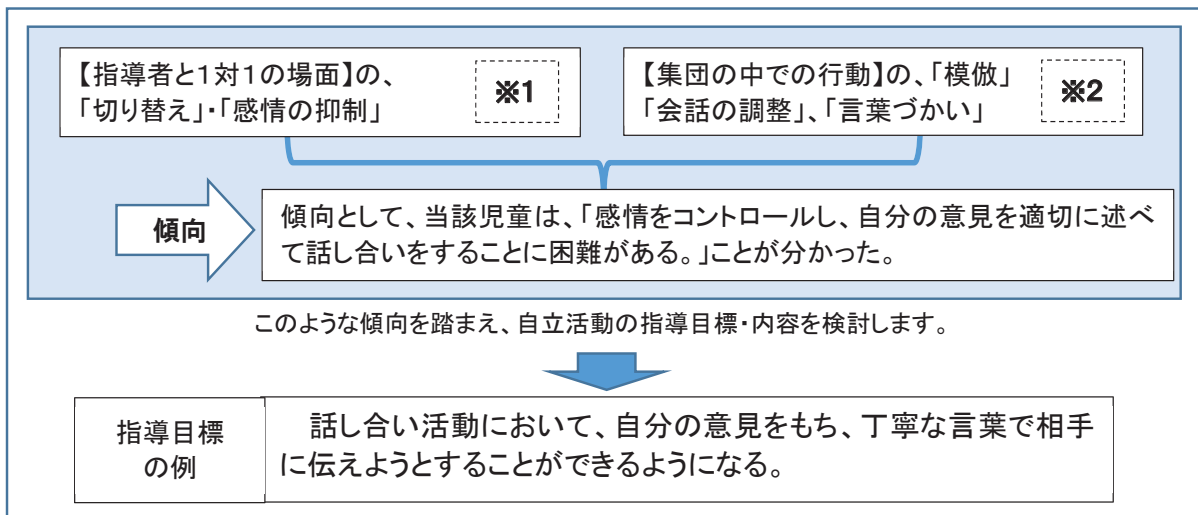
学習面のつまずきの状態から、つまずきに対する指導のみを考えるのではなく、つまずきの原因をよく分析して、一人一人の特性に応じた支援の手だてを考えていきます。

## チェックリスト等を活用した目標設定の例

ここでは、「社会性・行動のチェックリスト」を活用し、指導目標を設定した例を紹介します。

81 ページのチェックリストの結果から、当該児童の傾向として、「感情をコントロールし、自分の意見を適切に述べて話し合いをすることに困難がある。」ことがわかります（※1、※2を参照）。

このような傾向を踏まえ、自立活動の指導目標・内容を検討します。



例えば、自立活動の指導内容として話し合い活動を取り入れ、児童が自分の意見を適切な方法で相手に伝えるとともに、相手の考えや気持ちを受け止めることができるようになることを目指して指導計画を作成します。

また、「指導者と1対1の場面」に比べて、「集団の中での行動」の評価が低かったり、ばらつきが見られたりする様な傾向があれば、集団の中での社会性やコミュニケーション能力を上げていくことについて指導目標を設定し、指導内容を検討することが考えられます。

その他、人と接するうえでのマナーや、相手の意見を聞き、共感したり、自分の考えや気持ちとの折り合いをつけたりすることを目標に、自立活動の時間の指導計画を作成していくことが考えられます。

様式2-2

社会性・行動のチェックリスト

対象児童  
学校名

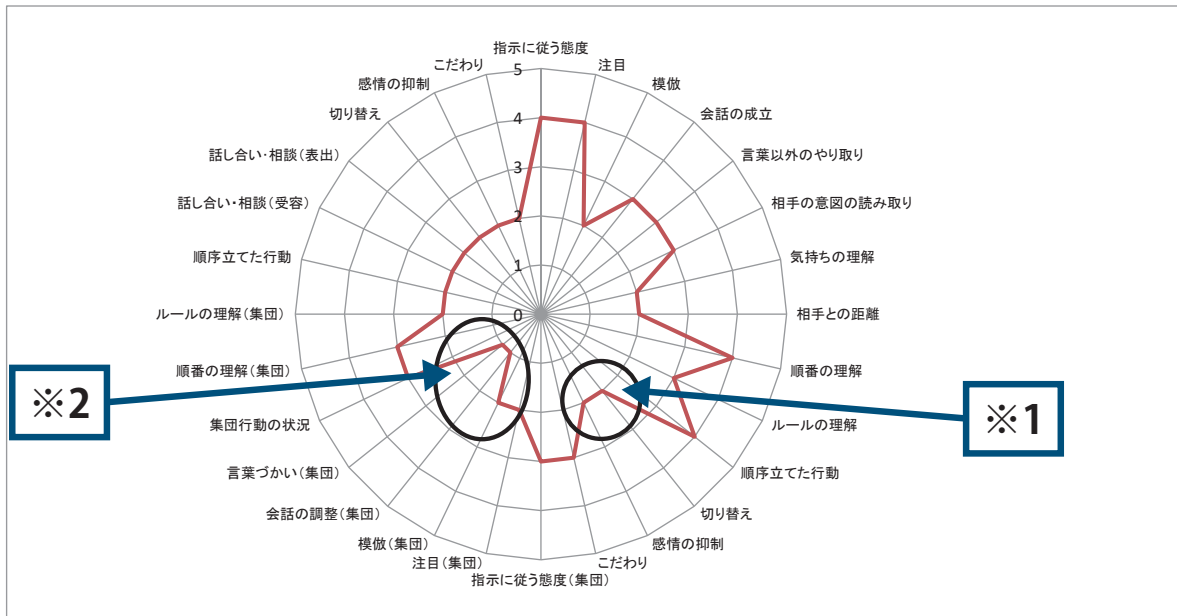
A  
〇〇学校

記入者  
学年・学級

〇〇 〇〇  
〇年〇組

記入日 令和2年5月〇日

観察項目等	チェック	観察内容	A		記入者		前回の結果	特記事項	
			できない 〇課題がある	〇できることもある 〇少しできる 〇ほとんど課題	〇時々できる 〇まあまあできる 〇時々課題になる	〇だいたいできる 〇普通にできる 〇たまに課題になる			〇いつでもできる 〇よくできる 〇全く課題がない
指導者と一対一の場面	対人関係	指示に従う態度	4	指示に従って行動する等			〇		
		注目	4	指示した場所・ものに注目する等			〇		
		模倣	2	簡単な動作の模倣、手遊び等		〇			
		会話の成立	3	会話が成り立つ、質問等の適切に答える等			〇		
		言葉以外のやり取り	3	アイコンタクト・表情や態度の意味疎通			〇		
		相手の意図の読み取り	3	表情の理解や指差し指示だけで着席する等			〇		
		気持ちの理解	2	相手の気持ちが理解できる等		〇			
		相手との距離	2	物や人との適切な距離の把握等		〇			
		順番の理解	4	相手と順番を守ってやり取りできる等			〇		
		ルールの理解	3	ルールを守ってやりとりできる等			〇		
		順序立てた行動	4	スケジュールにそって一人で活動する等	※1			〇	
		情緒のコントロール	切り替え	2	感情の切り替えができる等			〇	
			感情の抑制	2	自分の感情をコントロールできる等			〇	
こだわり	3		こだわりが出てしまう等			〇			
集団の中の行動	対人関係	指示に従う態度(集団)	3	指示に従って行動する等			〇		
		注目(集団)	2	指導者の指示に注目する等			〇		
		模倣(集団)	2	簡単な動作の模倣、手遊び等			〇		
		会話の調整(集団)	1	声のトーンや言葉の抑揚、間のとおり方、声の大きさ等	〇				
		言葉づかい(集団)	1	正しい語句、丁寧な言葉、慣用語で話す等	〇				
		集団行動の状況	3	列に並んだり、みんなが何をやろうとしていることも見て活動できる等			〇		
		順番の理解(集団)	3	集団のルールが分かり、守りながら活動できる等			〇		
		ルールの理解(集団)	2	集団のルールが分かり、守りながら活動できる等			〇		
		順序立てた行動	2	集団の流れの中でスケジュール等にそって活動する等			〇		
		情緒のコントロール	話し合い・相談(受容)	2	話し合い・相談の場面で、人の意見を受け入れることができる等の受容			〇	
			話し合い・相談(表出)	2	話し合い・相談の場面で、自分の意見を適切に表出できる(表出)			〇	
			切り替え	2	気持ちの切り替えができる等			〇	
				感情の抑制	2	自分の感情をコントロールできる等			〇
		こだわり	2	こだわりが出てしまう等			〇		





## 4

## 在籍学級と特別支援教室による指導の連携

特別支援教室における特別な指導は、児童・生徒の困難さを改善することによって在籍学級で学校生活を送れるようになることが目的です。

この目的を、児童・生徒に関わる全ての人々が共有して指導に当たることが重要です。また、特別支援教室では、対象となる児童・生徒が在籍する全ての学校に、巡回指導教員が巡回することのメリットを最大限に生かし、在籍学級担任と巡回指導教員が連携・協力していく必要があります。

特別支援教室の指導目標の設定に当たっては、以下のような観点に留意する必要があります。

- ◆ 在籍学級担任の関与が不十分な場合  
例) 在籍学級担任と巡回指導教員との間で、児童・生徒の実態や課題、指導目標について共通理解が図られていない。
- ◆ 一部特別な指導として行う特別支援教室の指導では指導目標の達成が困難な場合  
例) 課題に対して、指導目標の設定が高すぎる。
- ◆ チェックリスト等から把握した児童・生徒の課題が十分に反映されていない場合  
例) 課題と目標が対応していない。

上記のような場合は、特別支援教室の指導と在籍学級の指導との関連や連携が不十分であり、結果的に、指導の効果が得られにくい状況であると考えられます。

在籍学級と特別支援教室、双方の指導を確実にいき、相互に関連を深めるためには、在籍学級ですでに作成されている「学校生活支援シート（個別の教育支援計画）」と個別指導計画に基づき、特別支援教室での指導計画を作成する必要があります。

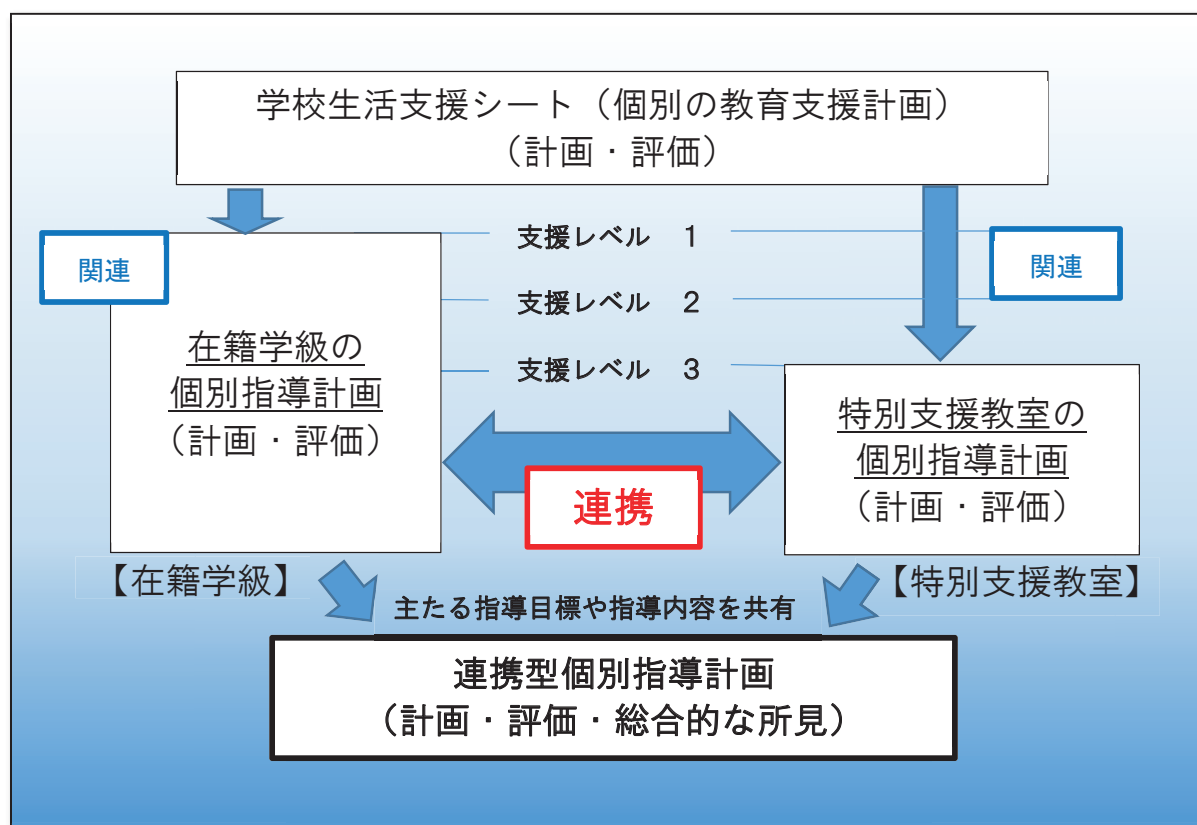
小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月告示）では（中学校学習指導要領においても同様の記述）、「通常の学級に在籍する、障害のある児童などの指導に当たっては、個別の教育支援計画及び個別指導計画を作成し、活用に努めること」と示しています。また、「特別支援学級に在籍する児童や通級による指導を受ける児童は、個別の教育支援計画及び個別指導計画を全員について作成・活用すること」としています。



特別支援教室を利用している児童・生徒については、在籍学級及び特別支援教室において、各区市町村教育委員会または各学校で設定された様式により、学校生活支援シート（個別の教育支援計画）及び個別指導計画が作成されています。巡回指導教員が在籍学級担任と互いに連携を図り、当該児童・生徒の指導に当たるため、それぞれの指導から、主たる指導目標や指導内容を取り上げ、連携型個別指導計画を作成・活用していくことが効果的です。

連携型個別指導計画の様式は「小・中学校の特別支援教育の推進のために（平成26年3月 東京都教育委員会）」において例示していますが、在籍学級及び特別支援教室でそれぞれ作成している個別指導計画の様式が「連携を進める工夫」のもとに作成されているなど、既存の様式で十分にその目的を達成している場合には、新たに様式の作成を求めものではありません。

連携型個別指導計画を活用し、在籍学級担任は巡回指導教員と情報を共有し、当該児童・生徒への指導の総合的な所見を記載し、次の指導に引き継いでいくことが大切です。



# 連携型個別指導計画の作成例

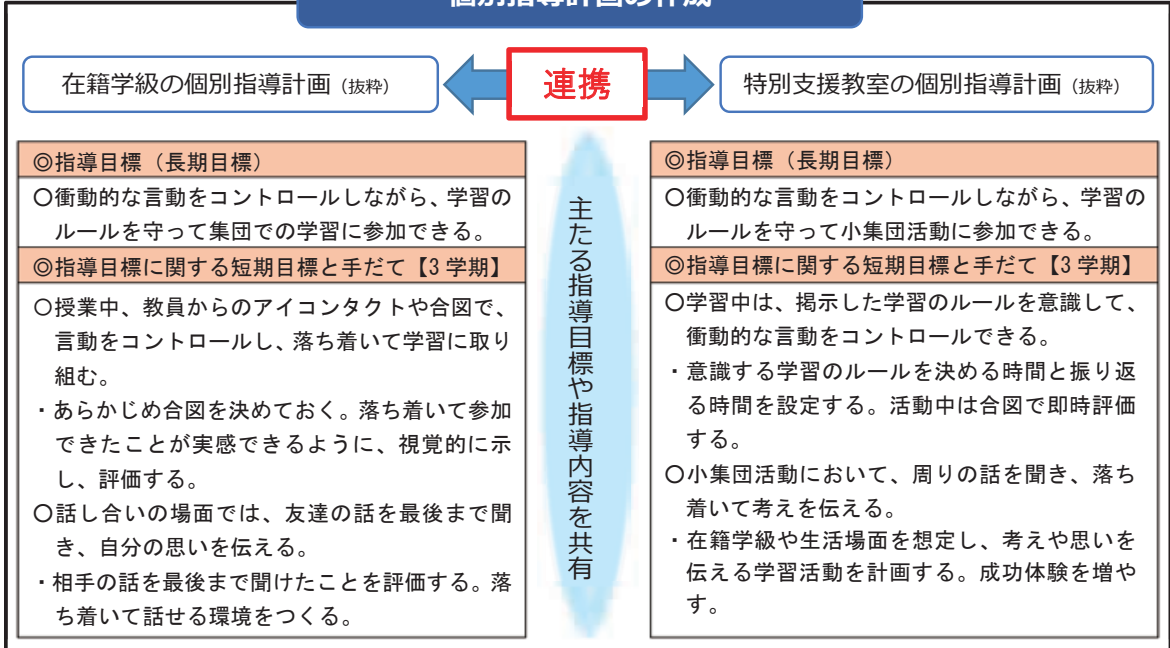
## 学校生活支援シート（個別の教育支援計画）

【事例1】小2 注意欠陥多動性障害

1 学校生活への期待や成長への願い（こんな学校生活がしたい、こんな子供（大人）に育ってほしい、など）	
本人から	勉強をがんばる。友達と仲よくしたい。
保護者から	・友達と仲よく、楽しい学校生活を過ごしてほしい。 ・落ち着いて学習してほしい。
2 現在のお子さんの様子（得意なこと・頑張っていること、不安なことなど）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・生き物が好きで、小さいころから夢中になりやすい。</li> <li>・家では手伝いを喜ぶ。他のことに気持ちが向き、途中で終わってしまうことが多い。</li> <li>・人見知りをせず、誰にでもすぐに話しかけ、自分の話がなかなか止まらない。</li> <li>・友達と一緒に遊ぶときに勝手にルールを変えたり、命令口調になったりするため、ケンカになり、自分からなかなか謝ることが難しい。</li> <li>・会話の中で肝心なことをうまく伝えられず、イライラしてしまう。最近は、できないことがあると、パニック状態になり、気持ちを立て直すのに時間がかかる。</li> </ul>	
3 支援の目標	
◎気持ちや言動をコントロールする力を身に付け、友達と一緒に、安定した学校生活を送れるように支援をする。	
学校の指導・支援	家庭の支援
○安定して学校生活を送るために ・学習中のルールを、わかりやすく提示する。 ・落ち着いて話ができる場所をつくる。 ・困ったときに示すサインを事前に決め、授業中に支援で	・イライラする様子が見られたら、ゆっくり休ませるようにする。 ・手伝いなどのがんばりを認め、家庭内での役割が果たせるよう励ます。



## 個別指導計画の作成





## 連携型個別指導計画

### 連携型個別指導計画（学期）

学校・氏名	△△区立〇〇小学校 2年 A		
在籍学級担任	〇〇 〇〇	通級による指導担当	□□ □□
記載者	〇〇、□□	作成日	令和3年3月〇日

#### ◎主な指導目標（長期目標）

●在籍学級での目標
○衝動的な言動をコントロールしながら、学習のルールを守って集団での学習に参加できる。
●特別支援教室での目標
○衝動的な言動をコントロールしながら、学習のルールを守って小集団活動に参加できる。

#### ◎主な指導目標に関する短期目標と手だて、及び評価

●在籍学級	
指導期間：令和3年1月～令和3年3月	
評価日：令和3年3月〇日	
短期目標	①授業中、教員からのアイコンタクトや合図で、言動をコントロールし、落ち着いて学習に取り組む。 ②話し合いの場面では、友達の話を最後まで聞き、自分の思いを伝える。
手だて	・あらかじめ合図を決めておく。落ち着いて参加できたことが実感できるように、視覚的に示し、評価する。 ・相手の話を最後まで聞いたことを評価する。落ち着いて話せる環境をつくる。
評価	・合図により、本人と意思の疎通ができ、行動に大きく現れる前に、コントロールしていた。教員から評価の丸シールを貼付し示していたが、示す頻度を減らしても落ち着いて取り組む姿から、学習のルールが定着してきたと考えられる。 ・友達とうまくいかなかった場合には、静かな場所で本人の話を聞くと、その後、気持ちを落ち着けて最後まで友達の話を聞くことができるようになってきた。友達と友好的に伝え合い、解決できることが増えた。

●特別支援教室	
指導期間：令和3年1月～令和3年3月	
評価日：令和3年3月〇日	
短期目標	①学習中は、掲示した学習のルールを意識して、衝動的な言動をコントロールできる。 ②小集団活動において、周りの話を聞き、落ち着いて考えを伝える。
手だて	・意識する学習のルールを決める時間と振り返る時間を設定する。活動中は合図で即時評価する。 ・在籍学級や生活場面を想定し、考えや思いを伝える学習活動を計画する。成功体験を増やす。
評価	・事前に目標を決め、言動に対する即時評価を続けたことで、活動中、本人がルールを意識している様子が見られた。 ・在籍学級担任と連携し、生活場面に生かせるようにした。本人が困る場面や協力して解決する場面を想定したロールプレイングで、子供同士で考えを伝え合って解決できたことを担任に伝えたとこ、学級での行動変容にもつながった。成功体験を本教室にて報告することがあり、自己肯定感の高まりが感じられた。

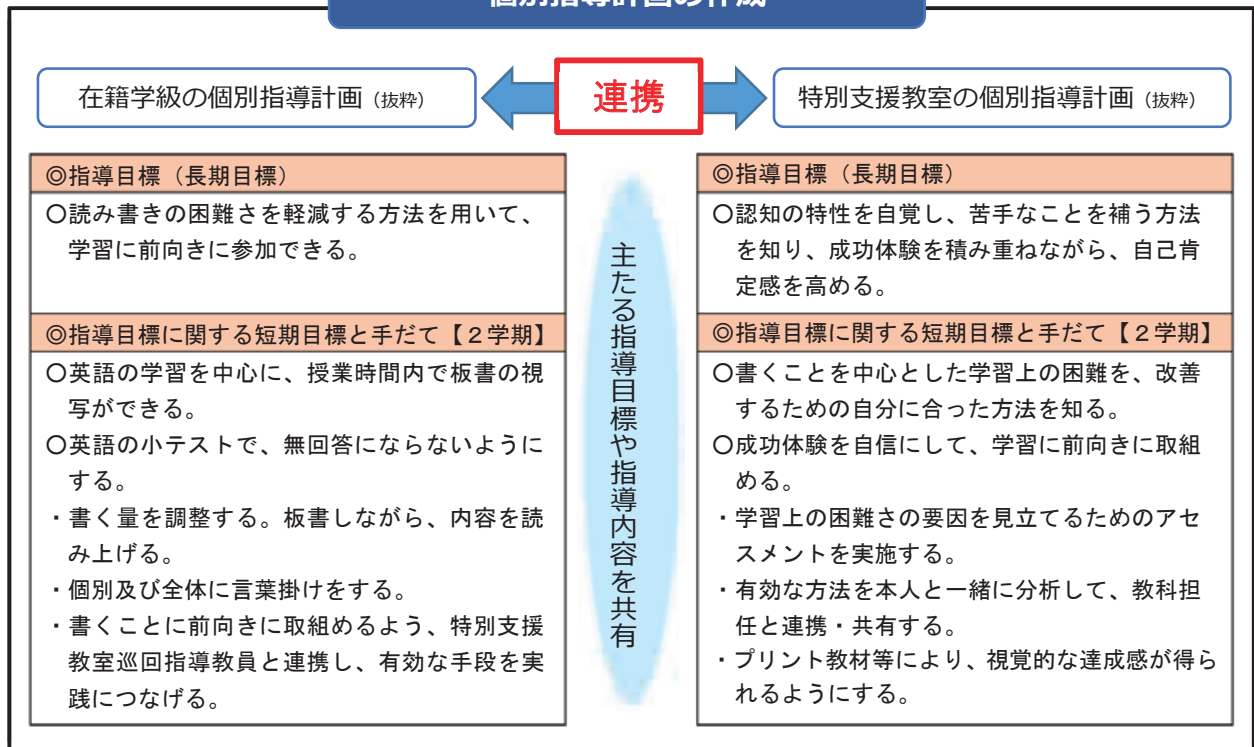
総合的な所見
○事前に約束事を確認したり、視覚的な手だてを講じたりしたことにより、Aさん自身が意識して言動をコントロールできるようになった。特別支援教室、在籍学級ともに、学習のルールを守ることができる場面が増え、集団活動における成功体験を積み重ねることができた。友達とも良好に関わり合って生活できるようになってきた。 ○今後は特別支援教室の利用を終了し、在籍学級での支援を継続していく。

## 学校生活支援シート（個別の教育支援計画）

### 【事例2】中2 学習障害（書く能力）

1 学校生活への期待や成長への願い（こんな学校生活がしたい、こんな子供（大人）に育ってほしい、など）	
本人から	英語ができるようになりたい。サッカーが有名な高校に行きたい。
保護者から	<ul style="list-style-type: none"> <li>・勉強にやる気を出してほしい。</li> <li>・目標に向かって、努力する人になってほしい。</li> </ul>
2 現在のお子さんの様子（得意なこと・頑張っていること、不安なことなど）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学3年からサッカーを習っていて、中学校の部活動を楽しみにしていた。部活は頑張っている。</li> <li>・1年生の秋頃から、勉強が分からない、やりたくないと言いたくなるようになった。</li> <li>・数学は得意だが、小学生の時から漢字を覚えるのが苦手で、漢字テストはよくなかった。中学生になり、英単語が覚えられず困っているようだ。</li> <li>・最近、チック症状があり、気になっている。</li> </ul>	
3 支援の目標	
◎学習面の困難さを軽減する方法を本人と一緒に考え、安心して学習に取り組めるように支援をする。	
学校の指導・支援	家庭の支援
◎安心して学習に取り組めるように <ul style="list-style-type: none"> <li>・読み書き困難の軽減のために、代替手段を検討する。</li> <li>・学習課題の量を調整し、取り組みやすくする。</li> <li>・本人に適した目標を立て、成功体験を積み重ねられるようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家庭でのがんばりや学校での目標達成について、少しのことでもほめる。</li> <li>・学習以外のところで、自信をなくさないよう、励ます。</li> </ul>

### 個別指導計画の作成





## 連携型個別指導計画

### 連携型個別指導計画（2学期）

学校・氏名	△△立〇〇中学校 2年 B		
在籍学級担任	〇〇 〇〇	通級による指導担当	□□ □□
記載者	〇〇、□□	作成日	令和2年12月〇日

#### ◎主な指導目標（長期目標）

●在籍学級での目標
○読み書きの困難さを軽減する方法を用いて、学習に前向きに参加することができる。
●特別支援教室での目標
○認知の特性を自覚し、苦手なことを補う方法を知り、成功体験を積み重ねながら、自己肯定感を高める。

#### ◎主な指導目標に関する短期目標と手だて、及び評価

●在籍学級			
指導期間：令和2年9月～令和2年12月		評価日：令和2年12月〇日	
短期目標	①英語の学習を中心に、授業時間内に板書を視写できる。 ②英単語の小テスト時に、無回答にならないようにする。	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業時間内に、視写できる量が増えた。英単語を読み上げる支援は有効であった。英単語の小テストでは、少しずつ空欄部分が減り、伴って正答数が増えてきた。学習態度にも変化があり、友達同士で問題を解き合っていた。</li> <li>・ノート記入の際、同じ班の友達に分からない字を自分から聞いていた。役割分担では、得手不得手を伝えるようにしていると同時に、周りの友達が率先して配慮している場面もあった。</li> </ul>
手だて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・書く量を調整する。板書しながら、内容を読み上げる。</li> <li>・個別及び全体に言葉掛けをする。</li> <li>・書くことに前向きに取組めるよう、特別支援教室巡回指導教員と連携し、様々な手段から有効な手段を見付け、実践につなげる。</li> </ul>		

●特別支援教室			
指導期間：令和2年9月～令和2年12月		評価日：令和2年12月〇日	
短期目標	①書くことを中心とした学習上の困難を、改善するための自分に合った方法を知る。 ②成功体験を自信にして、学習に前向きに取組める。	評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アセスメントにより、見て覚えられる量が限られており、聴覚的な支援を活用しながら、覚えることが有効であることが分かった。不注意による誤字表記も多々ある。</li> <li>・漢字を分解して、単純な漢字や言語的な手がかりで覚えたり、英単語のつづりのルールを理解して、覚えたりすることが有効であった。教員間で情報共有し、連携できたことで、安心して学習に取り組めるようになってきた。</li> <li>・小テストの結果に影響している要因を自己分析し、よい結果が続くことで、自信につながっている。</li> </ul>
手だて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習上の困難さの要因を見立てるためのアセスメントを実施する。</li> <li>・通室時に学んだ方法を、授業中に実践した後に振り返る。本人と一緒に分析して、有効な方法を在籍学級で生かせるように、教科担任と情報共有・連携する。</li> <li>・プリント教材等により、視覚的な達成感が得られるようにする。</li> </ul>		

総合的な所見